

歴史と解釈

—— ホーソン作品における歴史性をめぐって ——

増 永 俊 一

1 アメリカは記憶する — スペクタクルとしての国葬

国家の「歴史」やその歴史観といったものは、ナショナル・アイデンティティの問題であると同時に、しばしば個人のアイデンティティにも波及する。ナサニエル・ホーソンは、植民地時代にまで遡るアメリカの過去にひととき強い関心を示した作家であるが、この作家においても事情は変わらず、「歴史」は国家と作家個人の両者に関与し、ある種のイデオロギーとしての効力を発揮してゆく。当初、『植民地物語』という短篇集の編纂を試みたほどに、相当数のホーソン作品は舞台をアメリカの過去に取るが、「歴史」は作品のモチーフとなった時点ですでに中立の言説ではなく、巧みに加工され、そこに浮かび上がるのは過去と対照されることで立体化する作者の時代、十九世紀の現実である。ホーソンは、十九世紀前半という非常に大きな変化に見舞われた時代の透徹した観察者であったが、少なからず政治に関与したこの職業作家の創作活動において、「歴史」はその重要な媒介物であったのだ。

そういったホーソンの「歴史」に対するスタンスに倣って、昨今のアメリカの動向を眺めていると、現在に至るまで途切れることなく報じられるイラク関連のニュースに混じって、2004年6月5日に死去したロナルド・レーガン元大統領の訃報と、その後の国葬を巡る動きは相当に扱いの大きいものとして目を引いた。レー

ガン元大統領と言え、その経済政策が今や「レーガノミックス」として一般名詞化するほどアメリカの一時代を画した大統領であった。国防費を増大させた挙げ句、国家財政の悪化を招き、それは現在の「双子の赤字」産み出したが、一方で確かに「冷戦」は終結した。そして、その保守主義的立場と「強いアメリカ」の復活は、現在のブッシュ大統領に相当強引な形で継承されている。「悪の帝国」であった旧ソ連は消滅したが、現在はそれに代わって「悪の枢軸」との闘いにアメリカは余念がない。

しばらく紙面ににぎわすことになった「国葬」に関する一連の報道は、しかし、政治経済に関する個人の業績評価とは別の次元で些か奇異に映るものであった。遺体が安置された連邦議会議事堂には数万人の弔問客が訪れ、テレビで映し出される映像では沿道には人が溢れるばかり。新聞報道はこう伝える。

「星条旗に包まれたひつぎの側には、1時間に2000人以上が弔問に訪れ、ゆっくりと歩を進めた。なかには7時間待った人もいる」 (ワシントン：10日ロイター)

まさに、国家全体が喪に服しているという風情である。ワシントン大聖堂で大統領経験者の国葬が営まれたのは、1973年のジョンソン氏以来31年ぶりのことであるが、この大統領葬儀の様子は『リンカーンの世紀』(巽孝之)で描き出されるリンカーン国葬の様子を彷彿とさせる。

リンカーン暗殺後、その遺体がホワイトハウスへ戻ってからというもの、ワシントン中の人々が喪服をまとい「全世界が大親友を失ったような悲しみ」に陥っていたことは、あまりにも良く知られる。4月18日には、2万5千人もの弔問客が亡き大統領の眠るホワイトハウス内部を訪れ、翌日19日になってイースト・ルームにてしめやかに葬儀が行われ、アメリカ国民はみな自らの属する各地の教会に赴き、深い祈りを捧げている。 (176)

そして、リンカーン大統領の場合、ワシントンでの国葬の後「霊柩列車」が仕立

てられ、故郷イリノイ州スプリングフィールドまでおよそ 1700 マイルの帰路についたことで、この国民的哀悼は「国民的スペクタクル」にまで昇華する。レーガン氏の遺体も国葬後ただちにこの俳優にして大統領の原点であるカリフォルニア州シミバレーに運ばれ、11 日中にレーガン記念図書館敷地内に埋葬され、一連の葬送行事は無事終了した。

しかし、この国葬に関して何よりも驚かされるのは、レーガン本人が生前 300 ページに及ぶ自らの葬儀の「脚本」を作成していたという事実である。「レーガン元大統領は 1981 年の就任時から作成に着手、8 年がかりで綿密な脚本を完成させ、その後はナンシー夫人が毎年、細部の手直しを続けてきた」という。自らの国葬に備えて「脚本」を書くことは、レーガンにとって職務であり公務であったのである。国葬を担当した米陸軍司令官は、「運営上やむをえず変更した部分はあるが、9 割以上がスクリプト（脚本）に基づいている」と語っている。しかし、この「脚本」はレーガンが元俳優であったから書かれたのではない。報道はさらにこう伝えている。

「ケネディ大統領の暗殺後、米国の大統領は葬儀の混乱を避けるため、自ら葬儀の段取りを決めておくのが慣例。元ハリウッド俳優のレーガン氏にとっては、最後の“監督・主演作品”となった」
(読売新聞朝刊：2004 年 6 月 12 日)

レーガン元大統領の国葬は、様々な民族、宗教、政治的言説の統合の象徴としての「大統領」に対する国民の想いの強さが、アメリカ合衆国の外部からは想像の及ばないものであることをつくづく実感させるものであった。と同時に、大統領国葬を「国民的スペクタクル」に仕立て上げようとする衝動が、歴史の浅いこの国には本質的に内在していることを暗示する。一人の大統領の葬儀を「一大スペクタクル」に仕立て上げることは、取りも直さず国家の記憶を意識的により鮮明なものとする営為に他ならない。そして、元大統領本人によって書かれた「脚本」とそれに基づく国葬は、新たな「歴史」を書き加える一方で、何かを巧妙に排除する装置でもあ

る。事実、「イラン・コントラゲート事件」への関与など、レーガン元大統領にとっての汚点は、この壮大な「スペクタクル」の陰に埋没してしまったのである。

さて、ひたすらアメリカの過去に目を凝らした作家ホーソーンは、この国の「歴史」に対して、どのように向き合っていたのであろうか。一例として、ホーソーンの初期短篇である「ロジャー・マルヴィンの埋葬」(“Roger Malvin’s Burial” 1832)冒頭の一節を見てみよう。

想像力というものは、幾つかの些細な事情をうまく影の領域に押し込め、敵地の真ん中で味方に倍する部隊に戦いを挑んだ少人数の英雄的行動の中に、賞讃に値することを数多く見いだせるものようです。(MOM 337)

この作品はアメリカの開拓時代を舞台とし、「ラヴェルの戦い」という開拓民とインディアンとの間に発生した戦闘という史実にその着想を得て書かれたものである。ホーソーンが母校ボードゥン大学を卒業した1825年には、ちょうどこの戦いの百周年を記念する行事が各地で盛大に祝われていた。その祝賀ムードを体験したホーソーンは、数年後この歴史的事実に取材した短篇を書くに当たって、「歴史」というものに対して取ろうとする姿勢をここに静かに表明している。「歴史」とは編纂者次第でその記述が異なり、またいわゆる武勇伝というものも往々にして脚色に満ちている。ホーソーンは、いかなる「歴史」記述も免れない脚色を「想像力」という言葉に置き換えて、その特質を「幾つかの些細な事情をうまく影の領域に押し込む」ものとする。とある小さな部隊の英雄的な行動が、後世の想像力によって更に賞讃を集めてゆく様子を揶揄する響きが、この一節には伴っている。そして、この作家の視線は、記述された「歴史」が「影の領域」に押し込んでしまった事柄にむしろ向けられるのである。「歴史」はホーソーン最大のモチーフであったが、この作家の眼差しは記述された「歴史」のみならず、そこから巧妙に排除されたものにも向けられているのである。

2 作家と歴史、あるいはアレゴリーということ

ナサニエル・ホーソーンは、今から時代を遡ること 200 余年前の 1804 年、マサチューセッツ州セイラムに誕生した。全くの偶然とは言え、彼の誕生日はアメリカ独立記念日である 7 月 4 日で、国家の誕生日と個人の誕生日とが奇しくも重なっている。ホーソーンの伝記作者、ミラー (Edwin Miller) は、『セイラムは我が住処』(1991) で、毎年この日にこの新しい国は「毎年恒例の愛国的且つアルコール漬けのお祭り騒ぎ」(25) に浸っていたと記し、また同じくホーソーンの伝記である『ナサニエル・ホーソーンとその時代』(1980) において、メロー (James Mellow) はこの国家の誕生と作家誕生の偶然の一致が「ホーソーンの人生に影響することとなった」(9) と述べている。セイラム広場で毎年催される祝賀行事の喧噪は、そこからそう遠くはないホーソーンの家があるユニオン通りにまで響いてきたという。そして、ナサニエルは幼年期から青年期に至るまで、青々としたポプラの木立に囲まれた広場で催されるこの偉大なる国家の誕生記念に、「格別の思い」を抱いたとメローは記している。

ホーソーンがその作品の多くにおいて舞台を過去に取り、アメリカの「歴史」に強い関心を抱くことになった要因は、ひとつにこういった作家自身の個人的境遇に由来する。毎年 7 月 4 日は、自分の誕生を祝うと同時に国家の誕生に思いを馳せる機会であり、またホーソーン家の歴史も国家のそれに劣らず古い。ホーソーン家の先祖は 1630 年頃、つまりウインスロップ (John Winthrop) が植民地総督であった頃、マサチューセッツ湾岸植民地に渡ってきたという最も初期の移民である。その後もウィリアム・ホーソン (William Hathorne:1607-1681) は、当時の植民地議会の要人であると同時にクエイカー教徒の迫害者として名を馳せ、ジョン・ホーソン (John Hathorne:1641-1717) は言わずと知れたあの「魔女裁判」(1692) の判事である。しかし、ホーソーンの「歴史」に対する格別の関心は、一連の個人的事情ばかりではなく、この作家が生きた時代、十九世紀を覆う一つの時代精神でもあった。

十九世紀の社会状況を調査した研究によると、当時、「歴史」は空前のブームであり、歴史協会が各地に相次いで設立され始めたという。出版事情もそれに呼応し、歴史に関する話題が雑誌の定番の特集として生まれ、1820年代には小説も含め歴史を扱う書物が出版全体の85パーセント以上を占めていた（Buell 195）とされている。つまり、ホーソーンの歴史への執着は、必ずしも個人的趣味や懐古癖ばかりではなく、十九世紀という時代全体を覆っていた精神でもあったのである。ホーソーンの歴史に関わる数々の作品も、一面この時代のニーズに応えたものであった。十九世紀のアメリカがその過去を強く意識し、「歴史」に格別の関心を寄せた背景には、急激な経済的成長と国力の増大によって国家の在り方が激しく変化しつつあったという事情が存在している。当時のアメリカ社会は日々大きく変化し、ダイナミックであると同時に著しく安定を欠いていた。十九世紀とは、その激動のゆえに、過去の歴史に自らのアイデンティティを模索する時代であったのである。

以上のような次第で、ホーソーンの「歴史」への傾斜の要因は、その古い家柄という個人的境遇に全てを還元できない。そして、「職業作家」として生計を立てようとしていたホーソーンにとって、十九世紀の「歴史ブーム」が時代の要請として看過できない現象であったことは想像に難くない。「メリーマウントの五月柱」（“May-Pole of Merry Mount” 1836）冒頭の一節は、この作家にとって植民地以来のアメリカの「歴史」が意味するところを、何よりも明確に表している。

ここに試みるささやかなスケッチにおいて、我らがニューイングランドの年代記作者たちによって厳かに記録された数々の出来事は、ごく自然に自ずからある種のアレゴリーと化するのである。 (TT 54)

時代の潮流に違わず、ホーソーンもアメリカの「歴史」に強い関心を寄せた。しかし、その関心の在り方は「歴史」を盲目的に受容するというではなかった。この引用の最後にあるように、ホーソーンにとってのアメリカの歴史とは、「ある種のアレゴリー」なのである。周知の通り、アレゴリーという単語が“allos”、つま

りは“another”から派生しているように、この作家には「歴史」(history)から「別の物語」(another story)を紡ぎ出そうという強い内的衝動が存在する。そしてその衝動は、「国民的スペクタクル」が何であろうとも、それからは一歩身を引いて事態を眺めようとする、ホーソーンの「解釈」への欲望とも言えるだろう。

3 現在を支配する過去

十九世紀全般の歴史ブームが、せわしない日々の変化の渦中であって、過去を検証し輝かしい未来を志向しようとする国家のアイデンティティ再確認のための営為であったように、ひたすら過去に目を凝らす作家、ホーソーンにおいても、それは十九世紀現在と関わるものである。つまり、ホーソーンの一連の作品は、特定の時代を静的に描き出すものではなく、自らの時代と相互に関与するダイナミックなものであり、その意味で純然たる「歴史小説」ではない。「過去」を「現在」との関わりの中で見ようとする作家の姿勢は、作品としては四大ロマンスのひとつ、『七破風の屋敷』(*The House of the Seven Gables* 1851)のモチーフに最も端的に表されている。まずは、作者自ら「序文」においてこう宣言する。

この物語がロマンスの範疇にあるという主張は、ある過ぎ去った時代を我々から飛び去りつつある他でもない現在と結びつけようとする企てに由来する。 (HSG 2)

この物語において真の主役は「屋敷」そのものであるが、「七破風の屋敷」という構造物、あるいは「過去」を幽閉する装置によって、巧みに「過去」と「現在」が対置されている。つまり、150年以上も前の植民地時代に建立されたという古い屋敷の内部には「過去」が充満し、屋敷の外には十九世紀「現在」の光景が、語り手の表現を借りるならば「大いなる世界の活動」(HSG 159)が、繰り広げられている。屋敷の間借り人、ホールグレイブはこうフィービーに語りかける。

「この屋敷はですよ、思うに、僕が今しがた責め立てていた、ありとあらゆる悪影響をまき散らす、あのぞっとするような忌まわしい過去が形となって現れたものなのです」
(HSG 184)

一方、クリフォードが屋敷のアーチ型の窓から外を覗いてみれば、そこにはにぎやかな十九世紀現在のアメリカが広がる。乗合馬車が目に留まり、肉屋や魚屋の荷馬車が行き交い、榆の木の木陰では手回し風琴を持ったイタリア人の若者が、人形劇を始める。そして、クリフォードの耳には蒸気機関車の音も聞こえてくる。それは、「騒々しい蒸気の悪魔」(160) ののだけれども。

ホーソーンにとって「過去」とは、過ぎ去り、その活動を停止し、死に絶えたものではなく、その命脈を保って「現在」とつながる。しかし、この「過去」は、少なくとも唐突なハッピー・エンディングまでは屋敷の住人たちを呪縛し、決して明るい未来の展望は開けない。ホールグレイブはこうも語る。

「この過去というものを、僕たちは消し去ることはついで出来ないことなのでしょうか」と彼は、これまで通り思い詰めた口調を変えることなく叫んだ。「過去はまるで巨人の死体のように現在にのし掛かっているのです」
(HSG 182)

「過去」は「現在」にのし掛かり、今にも「現在」を押しつぶさんばかりだ。トリリング(Lionel Trilling) は、『過剰な想像力』(*The Liberal Imagination* 1950) において、「過去の魅力の一部は、その静けさにある」(206) と言ったが、ホーソーンにとっての「過去」とは、むしろ猛々しい。

ひたすら明るく通りに喧噪が響き渡る十九世紀現在に奇妙な形で残存する「呪われた過去」。この異物(異質なもの)としての「屋敷」の描写こそ、「歴史ブーム」に沸き返る十九世紀にあって、その時代精神とは異質な作家ホーソーン流の歴史観の存在を示唆するものなのである。

4 過去に投影される現在

ホーソーンの代表作が、アメリカの植民地時代を舞台とするロマンスである『緋文字』(*The Scarlet Letter* 1850)であることは論を待たないが、今や国民文学的地位を確立したこの小説は、その地位に比例するかのように何度となく映画化されている。1910年代のサイレント映画時代を含めてこれまでに実に8回映画化され、最新のものはローランド・ジョフィ監督、デミ・ムーア主演(ヘスター役)の『スカーレット・レター』(1995年公開)である。

文学作品が映画化される場合、原作の持ち味とは相当に隔たってしまうことが多いが、ジョフィ／ムーアの『スカーレット・レター』もその例外ではない。まず映画の冒頭描写からして、原作からはおよそかけ離れたものとなっている。アメリカン・インディアンの酋長マソソイトの葬儀が息子のメタコメットによって厳かに執り行われているが、そのような描写は原作の何処にも描かれてはいない。映画ではその葬儀の場面にピューリタン植民地の白人たちも姿を現し、デイズデイルが早くもその場に姿を現す。

しかし、その筋運びは原作の改作の程度において非難されるにしても、アメリカ史の観点から見ればそれほど逸脱しているわけではない。命からがらプリマスの地に辿り着いたピルグリム・ファーザーズたちを好意的に迎え入れたインディアンの大酋長は事実マソソイトであったし、その後インディアンと白人たちの関係がこじれ、やがては大規模なインディアン戦争へと発展した時のインディアン側の指導者は、キング・フィリップことメタコメットである。「父はあのとき、おまえたち白人たちを殺しておけばよかったのだ」というこの映画におけるメタコメットの台詞も、歴史の成り行きに心憎いばかりに配慮している。ホーソーンが『緋文字』において割愛してしまった植民地建設の経緯を忠実に再現しているのは、むしろジョフィの映画『スカーレット・レター』の方である。そして、格別に強調されているのは、侵略者としての白人と非抑圧者としてのネイティブ・アメリカンという構図である。この映画の脚本構成は、多文化共生という現在のアメリカが保持する言説

を見事に反映していると言えるだろう。

次にジョフイによる『スカーレット・レター』が強調してやまないのは、ヘスターの圧倒的な強さである。そもそも、ヘスター役の主演にデミ・ムーアを起用した時点で、その狙いは明白なものであったであろう。勿論、原テキストにおいてもヘスターは決してか弱き女性ではなく、「女性のたくましさを備えた強い女」(161)として提示されている。ホーソーンも、おそらくこの点については異存がないはずだ。しかし、原テキストのヘスターに輪を掛けて、デミ・ムーア演じるヘスターの強さは圧倒的である。特に、植民地を出てゆく馬車の手綱をしっかりと握っているのがヘスターで、デイズデイルがおとなしく隣りに座っているという場面は、戯画的ですらある。これもまた、現在のフェミニズムの潮流との関係を考えない訳には行かない。

しかし、この映画における原作の最大の改変は、語り手をヘスターの娘、パールに設定したことにある。二十世紀の映画の観客に対して「私の名前はパール」と語りをはじめると、最早パールは「生きる象形文字」(SL 207)としての象徴的な存在であることを停止する。その雄弁な語りを通して語られる母ヘスターは、生身の人間としてあたかも二十世紀現在に甦り、「ロマンス」(“A Romance”)という副題があったはずの『緋文字』は、いつの間にやらリアリズムに傾斜し、十七世紀ピューリタン植民地を舞台とするドキュメンタリーへとその装いを新たにす。そして、原作者の時代である十九世紀は、割愛された序章「税関」諸共、画面から消失するのである。

映画『スカーレット・レター』は、タイトルページで「ホーソーンの小説から制約を受けることなく翻案」(“freely adapted from the novel by Nathaniel Hawthorne”)という断り書きを挿入した上で原作を自由に翻案し、アメリカの植民地時代に発生した不倫物語を再現するが、この十七世紀の舞台にはすぐれて二十世紀アメリカの価値観が投影されている。けれども、他でもない原作者ホーソーンが『緋文字』で行っていることは、実はローランド・ジョフイとさして変わるところがない。「歴史」を前にした作家と映画製作者は、共に何らかの「解釈」を実行する。

そして、ジョフィ版『スカーレット・レター』が、そこに二十世紀現在のアメリカを映し出すように、原テキスト『緋文字』においても、十七世紀植民地というその舞台には確実にホーソーンの十九世紀現在が投影されているからだ。『七破風の屋敷』において過去が十九世紀現在を照射したのとは逆のベクトルが、ここにはある。それは、過去に投影される十九世紀現在というベクトルなのである。

5 矯正の思想と「緋文字」

アメリカの過去に取材し、「歴史」に新たな光を当てようとするホーソーンであるが、この作家の歴史的検証は相当に精度が高い。例えばハッチンソン（Thomas Huchinson: 1711-1780）の『マサチューセッツ湾植民地の歴史』（*History of the Colony and Province of Massachusetts Bay* 1764, 1767）といった歴史書を詳細に渉って参照したようで、少なくとも歴史の外形的事実について、それが露骨に歪曲されることはない。この歴史的客観性といったものは、十七世紀ピューリタン共同体に特有のアレゴリカルな精神構造の理解にまで及ぶ。『緋文字』の次の一節はその典型である。

当時、太陽や月の出入りほど規則的に起こらない流星の出現やその他の自然現象を、超自然的なものによる多様な啓示として解釈することは、極めて一般的なことであった。（SL 154）

十七世紀ピューリタンの精神構造を考察したホール（David Hall）の論考が明らかにしているように、初期植民地の人々は様々な予兆を通して「超自然的なものの存在」（*Worlds of Wonder* 71）を確信していたのであり、当時のピューリタン共同体が事物を観念の表象として捉える心情に覆われ、集団の統一された解釈を可能にするアレゴリカルな精神風土にあったことは歴史的事実である。そして、「姦淫」に対する処罰として「緋文字」を胸につけて一定期間共同体で晒し者とされるとい

うこともまた歴史的事実であった。加えて言えば、ピューリタン共同体においては、この晒し者にされるという処罰はむしろ寛大な措置に属していたのである。

しかし、原テキスト『緋文字』において、十七世紀の舞台に投影する十九世紀の現実とは、まさにこの作品のタイトルである「緋文字」を中心に展開する。この処罰をめぐる作者の一連の記述には密かに十九世紀的価値観が忍び込み、アメリカの植民地時代という枠組みを時として逸脱する。社会システムとしての処罰と監視の歴史を解明したフーコーの記念碑的著作、『監獄の誕生』（1975）によれば、おおよそ十九世紀を境に処罰の在り方は大きく変化している。すなわち、十九世紀以前の処罰の特質とは、まず執拗に受刑者の肉体に苦痛を加える身体刑であり見せしめであって、この処刑という儀式に「民衆は観客として呼び出される」（フーコー 58）のである。事実、『緋文字』においてヘスターが民衆の前に引き出された折の様子を、語り手は「見世物」（“the spectacle” 56）と表現する。処罰は、社会の構成員に向けて教訓を与える絶好の機会であり、人々はその場に借り出され、犯罪の結末の目撃者となる。犯罪者は「収監」されたまま世間から隔絶されるのではなく、公開の場で安価で迅速な「処刑」に直面する。ヘスターは今、この公開の儀式としての処罰に臨んでいるのである。

第二章「広場」では、この公開の処罰を一目見ようと植民地の人々が集まってきている。語り手自身が「特筆すべきこと」（50）としているのだが、この場に居合わせた数人の女性の交わす会話は、犯罪者とその処罰に対する十七世紀という時代の精神風土を浮き彫りにするものとしてたいそう興味深い。一人の女は、姦淫という当時においては重大な罪を犯したヘスター・プリンに対して、公式の処罰を待つまでもなく私的に制裁を下すことの方が「おおやけの利益」（51）に叶うことだと言う。身体刑の時代とは、私的制裁、リンチの時代でもある。また、別の女性は、ヘスターに下された今回の処罰内容が不十分だとして、少なくともヘスターのひたいに焼きごてで烙印を押すべきだと主張する。そして、裁判官を自認する五人の間に鬱積した不満はついに、ヘスターへの死刑宣告に至る。それは、「もっとも醜くもっとも無慈悲」（51）な女の口から発せられた。

「この女はだよ、私らみんなの面をよごしたのだから、死ぬのが当然。そういう法律がないというのかね？あるとも、聖書にも法令書にも、ちゃんとある。こうなりゃ、それを無視した判事たちは、自分の女房や娘たちが道を外れたことをしたって、自業自得ってことさ！」 (51-2)

この女の主張は、当時の処罰の基準からすれば必ずしも無慈悲で残酷なものではない。ホーソーンが最初に強調するように、現実のピューリタン共同体も決して犯罪とは無縁ではなく、矛盾を孕んだユートピアであった。そして、深刻な社会的タブーに対しては、厳罰をもって対処する社会であったのだ。流神、殺人、獣姦、同性愛、姦淫、偽証、反逆に対する処罰は、おおむね死刑であったのである (Hall 175)。

しかし、この会話の輪に加わっている子供の手を引いた若い人妻の発言は、他の女性の発言とは異質だ。

「ああ、でも」子供の手を引いた若い人妻が、ごくおだやかに口をはさんだ。「あのしるしを隠すぐらいは自由にさせてあげたらどう、胸の痛みは消えはしないのですから」 (傍点筆者 51)

さらに後になって、この若い女性はこうも言う。

「まあ、みなさま、お静かに！」一番若い仲間の女が言った。「そんなこと、あの人に聞かせないで！あの文字を刺繍した、ひと針ひと針が、あの人の胸に突き刺さったはずですわ」 (傍点筆者 54)

若い女性の発言は、ヘスターに架空の死刑宣告を下したさきほどの「無慈悲な」女とは対照的で、むしろヘスターに同情と共感を寄せるものとなっている。この若い人妻は、ひょっとするとヘスターと境遇を同じくするのではないか。この場面は、

何とも思わせぶりに、人妻が伴う幼い子供もパール同様不義の子である可能性を暗示する。けれども、広場の女性たちそれぞれの発言の差異は、若い人妻の不倫を仄めかしつつ、単に不寛容と寛容の精神の対照であることを超えて、時代の価値観の推移をも包含する。十七世紀の身体刑の持つ意味が、主として社会に対する教訓であり警告として機能していたのに対して、若い女性の発言に潜んでいるのは処罰が犯罪者個人にもたらす意味である。つまり、姦淫の罪に対する辱めとしてヘスターが胸につけることになる緋文字というものが、対社会的であるよりも個人の内面に向かうものとして捉えられ、さらに緋文字が犯罪者個人の「矯正」をもたらす可能性まで示唆する発言となっているのである。

フーコーが先述の著作で指摘している十九世紀に起こった懲罰の劇的変化とは、残酷な身体刑から、より「人間的」(フーコー 57)であることを主張する懲罰へのシフトである。そして、懲罰は以後、おぞましい身体刑から犯罪に関与する人間の素質そのものを変えようとする「矯正」の思想に取って代わられる。広場の女性たちの会話はまさに懲罰の在り方をめぐって交わされ、語り手が慎重に描き分けているのは、世代間の意識の違いである。死刑を口にする無慈悲な女と若い女の発言に見られる差異は、刑罰の歴史におけるおぞましい身体刑から矯正への変遷と同調する密かな兆しであり、十七世紀という舞台に忽然と姿を現す十九世紀的価値観である。作家の生きた時代である十九世紀に発生した一連の社会改良運動において、犯罪者の矯正に力点を置く刑務所改革は、重要な課題のひとつであったのだ。しかし、晒し台に立つという処罰が十七世紀において有していた公的な意味を決定的に解体するのは広場にいた若い人妻ではない。犯罪の当事者、ヘスター・プリン自身である。すなわち、緋文字を胸につけることが共同体において一つの生きた教訓となるというこの処罰の性質を、その受容の在り方とその後の行動によって根本的に変革し、十七世紀植民地という舞台をあたかも「人間的」な処罰が希求される十九世紀に置き換えたように思わせるのは、ヘスター本人なのである。

禁固の刑期を終えたヘスターが自ら選択した行動とは、その後もこの植民地にとどまるということである。語り手によれば、彼女の受けた処罰にはそういった制限

までは課せられてはおらず、たとえばヨーロッパに舞い戻ることも自由であった。つまり、公的な懲罰は所期の目的を達成したにもかかわらず、ヘスターはその「自由意志」(52)によって、ここに新たに自らを監禁しようというのである。そして、晒し者であり続けるというヘスターの決断は、ピューリタン共同体という社会に向けられたものではなく、個人の内面を強く指向する。彼女がこの決断をするに至った動機を、語り手は次のように述懐する。

彼女は自分に言い聞かせたのである—この土地はわたしがあやまちを犯した場所、だからこの世の罰を受けるのも、この場所でなければならず、それに、きつと、日ごとの恥辱の苦悩のために、わたしの魂は清められ、受難のたまものであるだけに聖者の魂にも似た、さきに失ったのとは異質の、あらたな純潔を獲得することになるだろう、と。

ヘスター・プリンは、そういうわけで、逃げ隠れしなかった。(傍点筆者 80)

この一節で明らかになるのは、公的な懲らしめを完遂したはずのヘスターが、自らに課した懲罰に潜在するおよそ十七世紀的ではない近代的なその意味である。緋文字を胸につけ、植民地になおもとどまり続けることによって魂は清められ、ヘスターは「新たな純潔」を獲得する。たとえ、緋文字が彼女の胸で焼き付くように思える瞬間があったとしてもそれは比喩に過ぎず、この新たな懲罰の性質が身体刑のそれではなく、明らかに「矯正」の思想を背景とするものであることを露呈する。

ヘスターの「緋文字」の受容の在り方は、ロマンス『緋文字』の歴史性を脅かすものである。十七世紀植民地時代を舞台とするこの罪と(処)罰の物語において、「過去」と「現在」とは相互に響き合い、いつのまにかそこには十九世紀の思惟が忍び込んでいる。十九世紀の「歴史ブーム」の中で再度強化された「進歩の神話」に対してホーソーンは懐疑的であったとされるが、一方でヘスターに演じさせる「緋文字」その後の生き様には、十九世紀の理想主義の反映を見ないわけにはゆかない。奴隷制解放運動が拡がりを見せ、女性の権利拡張の訴えが強まり、ひいては個人そ

それぞれの権利の尊重と理想的な社会の実現をめざした十九世紀とは、犯罪者の処遇についても「犯罪者それぞれに固有の特徴に合致した刑罰の個人化」(フーコー 99)の必要性が求められる時代であった。『緋文字』の十七世紀ニューイングランドには、ホーソーンの十九世紀が深く木霊している。十七世紀という過去に投影される十九世紀という現在。この立ち上がる個人の姿こそは、深く作者に内在するモチーフである。そして、「歴史」に対して投げ掛けられるこの作家の複雑な眼差しは、ブッシュ現大統領が掲げる正義と邪悪の戦いという世界観が忍ばせる二元論的枠組みの危うさをも、照射するのである。

※本稿は、「歴史と解釈 — 『緋文字』を中心に」と題した関西学院大学英米文学会総会(2004年6月26日、於:関西学院会館)における講演原稿に、加筆修正を施したものである。

参考文献

- Barlowe, Jamie. "Demi's Hester and Hester's Demi(se): *The (New) Scarlet Letter and Its Spectators*." *The Scarlet Mob of Scribblers: Rereading Hester Prynne*. Carbondale: Southern Illinois UP, 2000.
- Buell, Lawrence. *New England Literary Culture: From Revolution through Renaissance*. Cambridge: Cambridge UP, 1986.
- Foucault, Michel. *Discipline and Punish: The Birth of the Prison*. 1975: English translation of *Surveiller et punir: Naissance de la prison*. London: Penguin Books, 1979. (ミシェル・フーコー『監獄の誕生-監視と処罰-』田村俣訳、新潮社、1977) .
- Hall, David. *Worlds of Wonder, Days of Judgment: Popular Religious Belief in Early New England*. Cambridge: Harvard UP, 1989.
- Hawthorne, Nathaniel. *The Scarlet Letter*. Columbus: Ohio State UP, 1962. Vol. 1 of *The Centenary Edition of the Works of Nathaniel Hawthorne*. Ed. William Charvat, Roy Harvey Pearce, Claude M. Simpson.
- . *The House of the Seven Gables*. Columbus: Ohio State UP, 1965. Vol. 2 of *The Centenary Edition of the Works of Nathaniel Hawthorne*. Ed. William Charvat, Roy Harvey Pearce, Claude M. Simpson.
- . "The May-pole of Merry Mount." *Twice-Told Tales*. Columbus:

Ohio State UP, 1974. 54-67. Vol. 9 of *The Centenary Edition of the Works of Nathaniel Hawthorne*. Ed. William Charvat, Roy Harvey Pearce, Claude M. Simpson.

———. “Roger Malvin's Burial.” *Mosses from an Old Manse*. Columbus: Ohio State UP, 1974. 337-360. Vol.10 of *The Centenary Edition of the Works of Nathaniel Hawthorne*. Ed. William Charvat, Roy Harvey Pearce, Claude M. Simpson.

Mellow, James R. *Nathaniel Hawthorne in His Times*. Baltimore: Johns Hopkins UP, 1980.

Miller, Edwin Haviland. *Salem is My Dwelling Place: A Life of Nathaniel Hawthorne*. Iowa City: U of Iowa P, 1991.

Trilling, Lionel. *The Liberal Imagination: Essays on Literature and Society*. New York: Viking Press, 1950.

巽孝之『リンカーンの世紀—アメリカ大統領たちの文学思想史』青土社、2002.

増永俊一『アレゴリー解体—ナサニエル・ホーソン作品試論』英宝社、2004.